俤

おもかげ

～ 追 悼 集 ～

加 美 安 之(7 回)

林 晃(9 回)

中 村 武(15 回)

埼玉県立春日部高等学校　　体操部ＯＢ会

目　次

俤（おもかげ）・・・・・・・・・・・・・・1

故　加美　安之君の霊に捧ぐ・・・・・・・2～10

故　林　晃君を偲ぶ・・・・・・・・・・・11～20

故　中村　武君を偲ぶ・・・・・・・・・・21～28

雑記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

俤（おもかげ）

さきの敗戦から 74 年の歳月が流れ、昭和はすでに遠く、平成も終わり令和の御代を迎えました。

埼玉県立春日部高等学校も今年創立 120 周年を迎え、種々の記念行事が執り行われています。我が体操部もこれを機会に、不幸にも若くしてこの世を去った OB３名の追悼集（既に発行済み）を纏め、一冊に編集しました，OB 各位はもとより、在校生にもお目通し頂ければと思います。

令和元年旧盆

体操部 OB 会会長　金子　弘

故　加美　安之君の霊に捧ぐ

埼玉県立春日部高等学校
体操部 OB 会
県立春日部高等学校長　佐久間　安三郎

加美安之君は性質明朗且つ温順で実によい青年であった。4 月 26 日の夜、公舎にいると学校から電話というので急いで電話を受けると卒業生の加美安之君が列車事故に遭ったらしいとのことで驚いてしまった訳である。

加美君が春高に入学されたのは 27 年の 4 月で 30 年の 3 月に本校を優秀な成績で卒業されたのである。私は加美君の在学中は越谷高校に勤務中であったので同君を知る機会が無かったのであるが、30 年 4 月本校に着任して同君を知ることとなった。それは日体大学生として本校の体操部後輩の為に何かと親切且つ熱心に御指導に来校せられた折であった。同君はいつもにこやかに且つ温和な眼差しで人に接し、相対する人を自ら引きつける人柄を持っていたのである。加美君は本校在学中昭和 29 年には学徒総合体育大会において体操の部において初優勝を遂げ、また県体においては個人総合優勝、また全種目別優勝という輝かしい成果を収めたのであった。また関東大会において個人総合第 5 位、全国大会において徒手第 6 位という成績を収めたのである。

昭和 30 年には日体大学入学、後一層その道に精進せられその技の冴えを見せていたのである。その故かアジア大会において徒手演技の選手として選ばれたのである。同君と特に親しく接したのは昭和 33 年、本校において教育実習生としてであった。真面目にまた素朴な青年らしい性格は後輩の生徒諸君の胸に深く印象づけられたのであったまた、特に体操部の指導も熱心であった。同君は信念の人、実行の人であった。昨年日体大を優秀な成績で卒業せられ都立羽田工業高等学校に奉職され、その前途は嘱望せられていたのであるが天は何たる無情ぞ本年 4 月 26 日の夜、前途有為の青年の魂魄を奪い去ったのである。今は最早同君のにこやかな温容に相接し且つ相語ることが出来ない事を考えると全く無念やる方ないのである。

御両親始め御家族の方々、本校酒巻先生始め各先生方その他多くの同僚の嘆きは計り知れないものがあるのである。誠に残念至極である。然し君よ、君の本校在学中において樹立した数々の功績は本校の歴史と共に燦として輝くものであることを信ずるものである。加美君よ、何卒安らかに浄土の世界にお休み下さい。

吾が若き日を回顧して加美安之君を憶う

春高教諭　後藤　幸男

加美安之君の訃報程驚きと悲しみを与えたものはない。余りにも予期しない、余りにも突然の死であったからである。何か生前の思い出を書けと言われたがそれには私はこんな私の昔話から始めなければならない。

今から数えると 40 年も前の話になるのですが、私の中学 1 年生のとき（大正 6 年）私のクラスの一番前の列で私の机の並びでしたが一見茶目っ気な美少年がいました。私の机は後から 3 番目で右側に今参議院議員の戸吐武君、左側に新聞記者で最高位の石井文治君がおって、3 人でよくこの茶目な美少年の同級生を噂の中心にしたものです。50 名位のこのクラスで 2 年に進級するときは十数名が落第し、だいたい同数位の 2 年生の落第生が入ってくるのでクラスの人員は変わらないが卒業の頃になると一緒に入学以来の同年生はごく僅かしかいなくなってしまいました。しかし私は幸い右の加吐君も左の石井君も先頭には例の美少年を擁して相変わらずの位置のまま卒業の年頃になっていました。美少年は最早や美青年でした「彼は千

葉県の士族でこの近くに美しい姉さんと一緒にいるのだそうだ」などの噂話を耳にして私達も好奇心もそそられてか彼の噂をしたことを今もよく覚えています。その頃は雑司ヶ谷に住んでいたようです。私は大正 11 年の 3 月にその中学校を卒業して後何年か私はこの美青年のことを完全に忘れていました。ところが二十数年後、偶然な機会に私が故郷へ帰省した際たしかにこの美青年に相違ない紳士を遠目に見ましたが、お互い言葉を交わす機会もなく別れてしまいました。これからまた数年が過ぎました。私は突然この春高の教室で往時のあの美少年の面影をそっくりそのままの生徒をちょうど教卓のすぐ前に発見してハッとしました。名簿を見れば加美安之！何という偶然であろう・・・。よく似ているというよりそっくりだ！しかもクラスの最前列だ！見ている中に私の回想は遠く去りし日のあのクラスに飛び、夢は 14 の美少年を追って自分自身も新入生のような錯覚に襲われました。加美安之君はしばらくして私の中学の同級生たる加美末治君の御曹司であることがはっきりしました。以来私は彼を見る度毎に吾が少年時代を回想し、40 年前の懐かしい思い出なしに安之君を見ることはなかったのです。安之君が本校を卒業して日体大に入った後も時折姿を見せてくれましたが、私の追憶はいつも同じものでした時に私に印象深いのはあのアジア大会の公開演技に出たあの姿です。昭和 33 年 5 月 27 日です。日体大の学生による特別演技に出場した安之君はひときわ目立つ演技をもって私のスタンドからはっきりと見てとれました。5 万近い観衆が全く恍惚として見慣れた演技でした。このときのことをしみじみと話しあったこともありました。今にして思えば安之君にとって最も華やかな得意の日でもあったでしょう。日体大の卒業を前に教生として再び母校に過ごされた 1 ヶ月は楽しい日々であったと述懐もしていた。私は出席簿を抱えてにこやかに職員室に入ってくる安之君の印象を頭の中から永久に消すことはできないでしょう。それは余りにも偶然によって結ばれた親子二代にわたる不思議な因縁にまつわる関係の故であろう。

私は只管に若きみたまのご冥福を祈ります。

加美安之君を思う

春高 3 年当時担任　教諭　逆井　苑

加美君の思い出はかなり古くから始まる。戦争のまだ苛烈であった昭和 20 年私は村の小学校教師をしていたが、そのときの教頭は厳父加美末治氏であった。部下思いの優しい教頭先生で私も当時大変お世話になったものである。日曜日であったか私は急用のため川間の先生宅へお伺いしたことがある。初夏の日差しのぎらぎら照りつける日であった。先生は庭先に防空壕を掘っておられたが、そのとき先生を手伝っていたのが加美君であった。当時 10 歳くらいであったろうか。私を見てぴょこんと頭を下げ、恥ずかしそうに下を向いてしまった。純朴な少年という感じがした。それが加美君と私との初対面である。その後数年の歳月が流れた。安之君との再会は春日部高校においてである。入学は昭和 27 年。入学当初より体操部に入部し、連日遅くまで練習に励みました。顧問の酒巻先生の優れた御指導のためはもちろんであるが、やはり加美君の天性のしからしむるところであったのであろう着々と技術を伸ばし、県の大会は言うまでも無く全国大会に出場することも度々であった。しかし勉強も熱心で 2 年生の時には弟の伸之君と一緒に週 2 回私の家まで来て英語を特別に勉強した。電燈の下 3 人で机を囲み、語学の勉強をしたことは今となっては懐かしい、また悲しい思い出になってしまった。2 時間の勉強が終わり兄弟 2 人が自転車で暗い夜道を帰って行った姿が私の瞼に焼きついている。

高校 3 年生になって私は加美君の担任となった。勉強好きで純真明朗な生徒であった。比較的小柄な身体であったが器械体操で鍛えた筋肉が素晴らしく何よりもあのつぶらな目が誰にも愛される特徴になっていた。クラスの人気を一身に集めたことは当然である。卒業後加美君は日体大に進学され体育学を専門に研究された。大学卒業直前に教生として春日部高校に来られたが、思えばそれが最後となってしまった。高校時代とはまた見違えるほど成長されていましたが明朗な性格はそのままでそれにまた一段と落ち着きが加

わり立派な風格であった。

思えば残念なことである。大学まで卒業させやっと社会に出たと思った途端に長男に急逝された御両親の心中はいかばかりか。しかしこれも前世からの宿縁と思う外はない。加美君はすでに生前御両親に充分孝養を尽くされまた弟妹達には長男としての努めを果たされたに違いない。只御冥福を祈るのみ。　合掌

加美君の想い出

春高教諭　体操部　酒巻　敏夫

私は加美君の昭和 27 年 4 月から昭和 35 年 1 月までのことを思い浮かべながら記したいと思う。昭和 27 年 4 月 9 日と思うが春高第 1 学年に入学。そして体操部に入部してきた。背が小さく目のよく澄んだ可愛らしい丸い顔であった。言葉遣いも川間地方の得意なアクセントである。平行棒でバックロールなどやるとどうしても肩幅が不足しているのでこの種目が出来ず困ったものだった。この時代は幼い 1 年生と言いたい。

2 年生になって急激に体格がよくなってきた。何の種目においても技に一段の進歩が見られので毎日の指導が楽しみであった。県体には 2 年生で 4 名 B チームとして、加美、瀬田、渡辺、高橋が出場し 7 位の成績を収めた。この分では来年は県優勝もできると思い、私は君に「来年は必ず優勝する。」と断言した。そのとき君は大きな目で「先生、本当ですか。」と早口に言ったので「確信しているが。」と応答した。いよいよ部長も 2 年生になり一段の練習熱が加わった。雪の日に長ゴム靴を履いたまま外で平行棒を練習したり、始業前 2 電車（当時は本数も少なく 1 時間前）早く登校して練習したことは全く夢のように思われる。顧問の私としていやが上にも指導に熱が入ってくる。しかも厳格にやる。私がいると今まで出来た技も忘れた如く出来なくなる大声を出される、さらに出来ないといった具合で、今日は出て来なければいいがと何時も思ったそうである。合宿では渡辺君（同級生）と大いに食い競争をしたり、夜合宿所の電気を消して将棋をやったり大いに茶目っ気を発揮した。

3 年生になる。君を中心とした体操部はついに県下初優勝を遂げた。君の目には涙が浮かんでいる。わたしも嬉しさを隠しきれず涙を浮かべて大宮スポーツセンターで校歌を応援団に唱ってもらった感激は未だ昨日の如く思い出される。これを機にして君の技はさらに一段の冴えが加わってきた。関東大会個人総合第 5 位、大阪で開催された全国大会では徒手第 6 位となった。それから思い出すのは北海道の国体である。あの時の鉄棒は 9.6 だったと思う。私が埼玉の監督で引率、まさかこの点が出るとは君自身思っていなかったので 2 人手を握り合い大観衆も何のその抱き合って喜び合った。そしてそのときの拍手の長かったこと。他種目にも優秀な技であった。この時になると心理的にも君が打出された。何の屈託もない朗らかな性格で少しオッチョコチョイのところが欠点でもあったかしれないが長所でもあり誰にでも好かれた。全くボッチャンといった存在で北海道では毎日みんなを笑わせていた。牛乳瓶のふたを余り力を入れて箸で突っついたので牛乳が君の顔にすごくかかりおしろいでも塗ったようになってしまい、君は赤面もせず大笑いで誰かにぬぐってもらっていた。3 歳位の子供の格好で顔を前に出して。洞や湖では君と名も知らぬ魚を釣ったり、蟹を食い、アイヌを見たり帰路はよくも楽しく遊んだ国体でもあった。県体は学校対抗第 1 位はもちろんのこと全種目に優勝し、個人総合優勝もした。これは現在でも希である。

希望の日体大に合格。その後 4 年生になって 6 月教育実習生として本校で 1 ヶ月教授することになった。高校時代とあまり変わらない顔であったが、体格はさすが専門に体操をやったためか驚くほどの発達であった。全職員に親しまれそして可愛がられた毎日毎日がさぞ楽しかったことと思う。校長先生は常に「加美君は全く純情な良い人だ。」と私の姿を見るとおっしゃられました。その度ごとに私が褒められているごとくうれしかった。大学生活から一時教師の立場に立ったので大変勝手が違ったようだった。一例を挙げる

と、生徒を右に向かせたいときに（生徒と向かい合っている関係で）右を向ける号令をかけてしまったり、保健の授業に教室で生徒の顔を見るのが恥ずかしかったのか教卓を中心にぐるぐる回ったり、黒板を見ながら説明したりして1時間中赤い顔であった。授業が終わると君は「俺は先生が務まりそうもないですよ。」と言っておりました。それでも生徒に好感を持たれ、「先生、先生！」と幕われた。先生の2文字で思い出したが、君は「先生」と生徒に呼ばれても自分のこと、思わず私に「生徒が呼んでますよ。」と言っており、君自身とわかると急に言葉優しく話し出すという場面も度々であった。特に私の担当学年は進んでやってくれましたので、1時間中授業を見せてもらいました。指導方法については私の全力を発揮して君と研究したものでありますが、教案の書き方については余り話し合わなかったことは今もって申し訳なく思っています。その時に卒論のことで質問を受け色々と研究テーマを出したが、「君は体操が得意なのだから卒論は鉄棒運動の研究がよいと思う。1つの種目に対する肩、腰、膝、脚の関節等の運動分析をしたらどう。」と言ってみたところ、非常に喜んで意を決したようであった。放課後は日没も忘れ、部員に実技をやさしく指導してくれました。この時の君の姿は若鮎の如くピチピチしていた。先生方は美技にただため息を吐くのみで、「上手だ。」「全くうまい。」「神業だ」の連続でした。

11月21日～23日まで君の母校日体大において日本体育学会が開催されたので私も出席し、その時君に会い卒論は順調に進んでおり竹本先生（オリンピック選手）によいテーマだと褒められたと喜んで話してくれました。岩槻で会ったとき（OB会）卒論が優秀で賞をもらったと喜んでおり、私も安心した。

昭和34年4月に都立羽田工業高校に奉職決定の通知を受ける。久方ぶりにOB会で会う。元気な姿、スキーの1級を取ったこと、勤務の楽しい日々、運動会には苦労したがよくできた話、教師は勉強しなければならない話、会場から2人で駅まで教師の歩む道を話しながら全身希望の2字に膨れていた君であった。私は1泊泊まるように度々言ったが東京に行くとのことで、永遠の別れになるとはつゆ知らずホームで本年11月早大で開催される体育学会で会う約束の固い握手が最後であった。

加美君を想う

昭和27年卒　初代主将　飯村　文雄

加美君の悲報を知って以来今でも信じられない気持ちでいる。我々春高体操部のOBにとりこれ程悲しい淋しいことはない。体操部の歴史は浅く先輩の数少ない中に今後ともOB中心になり大いに活躍してもらう矢先の出来事だけに非常に惜しい。とにかく誠に惜しい人材を失ったことは残念で堪らない。

想えば加美君の一先輩として共に体操部生活を送り、競技会にも参加したその当時の加美君の成績は抜群であったことを思うとうれしくてならなかった。朝礼の時、運動部の成績発表のときのうれしさはまた格別だった。合宿の時の後輩の指導ぶりは本当に端で見る小生には全くよい教訓になった。

今年の正月に第3回OB会総会に出席した加美君のあの童顔が未だ小生の脳裏から去らずにいる。「飯村さん、すっかりご無沙汰してすみません。」と頭を下げて雪焼けした童顔にどんぐり眼をパチクリさせて挨拶されたときは思わず苦笑してしまった。心行くまで話しあった。加美君は何が物事に対しても愛着心の強い性格と思った通りどの道にいても熱心と勤勉で体験しようとする性格には自然と頭が下がる思いがした。尽きない話の中で「飯村さん、いつまでも童心を失わないようにしなくては駄目なんですネ。」と赤い眼をパチッとされて「人格の養成は一歩だとある大先輩も教えてくれました。」と付け加えた。小生の心の中で非常に感心した。それもいかにも申し訳なさそうにしみじみとその意味を解したように頭をうなだれて眼をこすった姿を思い浮かべると実に悲しい思いだ。加美君はみんなから同輩から先輩からそして後輩生徒から愛されたのだ。練習中に見せる熱心さと私生活の茶目っ気さとが交錯して今の小生の頭の中はただ適当に混合した気持ちの加美君の姿が浮かんでくる。

加美君　安らかに眠って下さい。衷心より御冥福をお祈り申し上げます。

昭和 35 年

加美君という人

甘粕　陽三

「そうですね。」彼と最初に会ったのは昭和 27 年、彼が春高に入学した年の春のことでした。当時、僕は体操部の新マネージャーとして部員をスカウトせんと張り切っていたものでした。でも当時、彼が入部を希望して部室に来た時には正直に言って少々考えたものでしたよ。中学生のような幼い体つき。そしてその上に乗っかっている丸い可愛い顔。（クルクルと動く目、そしてよく笑う子でした目をつぶると当時の彼の面影がハッキリと浮かんできますよ。）

そのとき初めて彼の名前を知り、また終生忘れることのできない名前ともなったのです。彼の練習ぶりを見て当時の不安が単なる杞憂に過ぎないことを知ったとき、僕は改めて彼を見直し自分自身を恥じたものでした。彼は部員の中でも特に目立つ小さな体で、どのような辛い練習にもよく耐えがんばっていました。これは僕だけの感じでなく OB もお認めになるでしょう、いかがですか？

彼は常に我々部員の中の人気者でしたね。でもそれは彼の言動のみからのものでなく、彼が新入部員のなかで高橋冨士雄くんと共に常に技術的にもその他の面でもトップレベルにあったことに由来すると僕は思うのです。その後僕は病を得、休学すると共に彼と会う機会もなくなった訳です。

之ゝ, それでも彼の名は飯村の口から始終聞かされたものです。春高のホープとしての。4 ヶ月ほどの短い交わりでしたが僕にはいろんな意味で忘れることのできない人なのですよ。諸君も静かに目を閉じて見給え、彼の当時の幼い笑顔が目の前に浮かんでくることだろう。

加美君、君のことは飯村の電話で知りましたよ。彼は咳き込んだ口調で、酒供養だと言っていました。この言葉の中から僕は飯村の悲しみを痛切に読みとることができたのです。僕も君のために祈ります。静かに、そして飯村の悲しみに負けぬ悲しみをもって。

「練習熱心な加美君」

第 2 代部長（昭和２９卒）金子 弘

26 日の 9 時半頃「ただいま」といつもの如く帰宅すると「加美君が交通事故で死んだそうです。」との知らせを受けた。加美君の死があまり突然であったのでその時はただ呆然としてしまい、なすべきすべを知らなかった。ふと我に返った時には、何故、何処でとその真偽を確かめる程であった。あの加美が・・・、あの加美が死んでしまったのか・・・、またどうしてそんなことになったのかと思いながら自分の部屋に閉じこもり今までのことをあれやこれやと思い浮かべた。彼は前から口癖のように「俺は不死身なんだ。」とよく冗談を言っていたものだ。事実、練習中に怪我をしてもちょっとくらいならものともせずに練習する程の斗志の持ち主であった。普段でも練習熱心で人が 1 回飛びつくところを 2 回、3 回と先を争って練習したものである。あれだけ立派な成績を挙げることができたのも彼の練習熱心が一役かっていたと思う。入部当時は 36kg しかない非常に小さな男であった。しかし身体は柔軟ですでに倒立が出来、何か将来性のある有望な部員の一人であった。1 年生当時は柔軟性を生かしたマットワークがなかなか得意であったが、身体の基礎ができていなかった（誰でもそうであるが）ため、器械の方は幾分進歩が遅かった。だが 2 年生の終わり頃からめきめきと頭角を現し、あの優勝の原動力となった。その後、日ごとに演技に磨きがかかり母校へ来るたびに我々の目を楽しませてくれた。これも彼の人一倍のファイトと練習熱心さの賜であったと思う。（その点、現役部員は彼を手本にして十分練習に励んでくれ、我々も 2 電車早く登校して練習したものだ）

しかし今は彼の演技も見られず、あのあどけない顔も悲しい想い出となってしまった。共に飲んで騒いだことも・・・。
　さあ加美！リングに飛びつかせてやる。今度はお前の番だぞ・・・！

可愛らしかった加美君

昭和 28 年　坪井　孝夫

　　加美君！
　　一僕の弟一
本当に君は「ぼくの弟」というに相応しかった
思い起こそう　ぼくがまだ高校 2 年の時
そう　季節も丁度今頃　つつじの花の咲く頃だった
君の入部で　ぼくは弟を得た喜びに　胸も膨らむばかりだった
君のあの紅顔と澄んだ黒い瞳は　今でも髣髴とイメージに残る

加美君！
君は本当に真面目だった
ぼくは真面目を愛するが故に君を愛した
君とその友情を確めあったのは
そして　合宿の余暇に試合の陰に
誠を誓い合ったのは　幾ばくか
君はいつも　ぼくを敬愛してくれた

ぼくは見守った　君の遥しい成長を
君の成長は素晴らしかった
正に努力と真面目の結晶だった
しかし今　結晶は崩壊し去った
透き通った大気の中で　つつじの花の中で
音もなく　白い女神の手によって
永久に溶解し去られてしまった

遠くなる！　このまま遠くなってしまうのだ
弟よ！ 4 次元の世界に連れ去られても
どんなに遠くなってしまっても　友情の絆を断つまい

1960 年 6 月

故　加美安之君に捧ぐ　　T.T.

共に全国大会に参加して

（昭和 29 年）同級生　瀬田隆司

　「全国高等学校体操競技選手権大会」。この長々とした名前の大会に出場するために僕達同級生 5 人がどんなに苦労をしたか。先生と僕達以外はそれ程感じないのかもしれない。

5人が揃って出場するという希望の下に真夏の焼けた砂の上を裸足で走ったり西風の吹く寒い日の凍りつくような鉄棒、そんな努力がやっと実り夢に描いた県優勝、そして関東大会、全日本選手権大会の出場権を得たときのうれしさは言葉には表せないものがあった。そのうれしさも手伝って関東大会、全国大会のための練習にも一段と熱が加わり全員真夏で目だけが光っていたのを思い出す。それなのに関東大会直前に僕が病気になり、加美君のおかげで関東大会に好成績を残したと手紙をもらったときのうれしさは何にも例えようがなかった。そのときから全日本ではそのお返しをするつもりでいたのにあまりよい成績が挙げられなかったのを今でもすまないと思っている。大阪に着いた日、初めての5人揃って県外遠征だったせいかみんな興奮して目が充血していたっけ。でも君の明るい性格のおかげで何とか平静に戻ったように記憶している。あの大会の思い出と言えば、試合当日に何だったかはっきり思い出せないけど連絡の手違いでひどく先生に怒られたっけ。岡本君の怒られるのを見て君が憤慨していたのが目に浮かぶようだ。会場でそれも大勢の観衆のいる中でちょっと恥ずかしかったね。道頓堀の汚い流れ、凍った西瓜の味、大会の独特の雰囲気、いまだに印象に残っている。もう一度あのメンバーで大阪に行ってみたいと思う。だけどもう君はいない。でも君が春高の体操部に、いや僕達仲間に残してくれた立派な目には見えない何物かが一緒に僕達と行を共にしてくれるだろう。

親愛なる加美君！安らかに眠りたまえ

加美君と関東大会に参加して

昭和29年卒　高橋　冨士雄

今は亡き加美君を偲んで春高時代関東大会に参加した事を振り返ってみよう。私が加美君を知ったのは入学して間もない英語のグループの事であったと記憶している。すぐ親しくなり加美君の勧めで体操部に入ったのであった。それから瀬田君、渡辺君と入部して4人のコンビが出来あがった。それから3年間楽しいことや苦しいことも共に分かち合い練習に励んだ。その甲斐あって学徒大会に春高は初優勝を遂げた。そこで私達は関東大会（茨城）、全日本大会（大阪）に出場できることになった。ところが関東大会の3,4日前に瀬田が急病で出場できなくなった。私達はガッカリした。何故というと私達は関東大会優勝を夢見ていたからだ。加美君などはより以上であった。加美君、渡辺君そして私の3人は頼田君の分までと酒巻先生に付き添われて水戸市内の旅館に入ったものだった。旅館に着くと電報、電話での激励に私達は何よりも心強く思ったことだ。翌日は大会第1日目、埼玉代表で春高チームも加美君を先頭に堂々と入場式に参加した事も昨日のように思い出される。そこでは1年生の春、夏休みの強化合宿にコーチに来て下さった塚脇先生（オリンピック選手）も見えた。そうそう、そう言えばその時撮った写真を今開いてみるとその中に加美君と私の肩に酒巻先生がぶら下がっているのがあった，皆元気で若々しく楽しそうに笑っていて・・・。しかし大会となると私など足が地に着かない程にあがってしまった。だが、終始ユーモラスな加美君に助けられ第1日を終わった。翌日新聞を見ると加美君が規定の総合で7位に入っているのを見た。気を良くした3人は自由で一層頑張ろうと宿舎を出た。自由でも加美君は実力を発揮し、総合（個人）第5位という輝かしい成績を収めた。学校対抗でも加美君のおかげで第5位という良い成績が得られたのであった。今も加美君の若さではち切れそうなあの身体、きびきびした動作そして気どらない加美君の笑顔が眼前に浮かんで消えない。思えば今年の正月、岩槻でOB会を開いたとき雪焼けした顔をほころばせながら「今朝、スキーしで帰ったばかりだ。」と言いながら遠くから参加してくれた。そして飲み歌い、愉快に話し合った。あの晩大宮駅まで送った。

何のためらいもなく互いに笑って別れた。それが親しき加美君との永遠の別れとなろうとは露知らず。

ただただ、加美君の冥福をお祈りするばかりだ。

加美さんを思う

昭和 30 年　桜井　均

僕は加美さんとは卒業後 2 度しか会わなかったと思います。一度は卒業した年の春学総大会で加美さんがコーチとして出られた時と渡辺さんの家で集まった時とです。新年会では一度もお会いできませんでした。だが会での話は加美さんの活躍ぶりが話題になり、何時も加美さんと会っていたようで面影が目の前から離れません。加美さんは小柄ですが何時もファイト満々で部室へ行くと「オス。」と言い、クリクリとした目で紅顔の美少年でした。時々渡辺さんと口げんかをしながらふざけていました。だが一旦練習に入ると、出来ない技はこなせるまで人を押しのけてもやり、僕等が出来ないと手を取り足を取り教えてくれました。加美さんの、芯から体操を楽しみ励んでやっていたあの姿が今でも思い浮かびます。無邪気というか純粋で素直で自分も加美さんみたいに行動できたらなあと思っております。加美さんが 3 年生の時です。あの時は加美さんの同級生全員が活躍され今もって本校では破れない春秋の優勝したときです。前の日までは調子が悪そうで自分でも感がわからないとか言ってみんなを心配させていましたが試合になってからはもうこれで卒業だと思ってやったのでしょうか力一杯演技して悔いのない出来で個人優勝を遂げられました。考えれば加美さんが春高初めての個人総合優勝者です。その時の加美さんの不屈の闘志が一番印象深く僕には残っております。それから日体大に進まれ、竹本先生（オリンピック選手）の教えを受け新人戦で活躍している等いろいろ酒巻先生を始め諸先輩に聞いておりました。だが残念にも加美さんが初めて新年会に出席された今年、僕が出られなかったとは当時はそう心残りも致しませんでしたが、今となっては残念で残念でなりません。きっと春高時代より心身共に立派に成人されたろうと思うと、会わなかったのがただただ惜しくてなりません。お葬式の日、加美さんの教え子から、先生の中で一番親しかった様子がありありと伺われ思わず涙が出てしまいました。何時かは加美さんを春高に呼び、体操部をもう一度優勝させたいと酒巻先生も思っていたようです。在部の諸君、加美さんが安心できるようがんばって下さい。加美さん、我々を見守って下さい。貴兄のやりたかったことの万分の一ですが、やらせていただきます。「加美さんの霊よ　安かれ」と祈ります。

昭和 35 年 5 月

加美先生の授業を受けて

体操部部長　平原　英雄

私が加美さんと初めて会ったのは、私が春高へ入学してから間もなくのことであった。その日の空はすっきりとした水色が一面を取り巻いており、まるで真夏の雲の如くところどころ真白な雲が浮かんでいた。私はこの日の第 5 時間目の体育の授業であったと記憶している。我々が校庭に整列して酒巻先生の受業を待っていると先生の後からもう 1 人同じくらいの身体をした学生らしき人がついてきた。先生は出席を取り終わるとすぐに「ここにいる人は春高の先輩で、日体大に在学中の加美先生だがこれから俺の代わりに体育の授業をやってもらう。」と言って紹介した。このとき私は「あっ。体操部の先輩で加美さんという人がいるというようなことを部の上級生の人が話しているのを聞いたことがあったので、この人がそうじゃないかな。」と思っていたがやはりそうであった。紹介された後、加美さんは我々をちょっと見回すかのようにしてから一礼した。その後で準備運動をしてからラジオ体操をしたが、加美さんは授業を教えるのが初めてらしく少々あがっていたようだった。我々が 2 日目の授業を受けた日は前とは違って雨の日であったので教室で保健体育の教科書を授業に用いた。加美さんは自分で教科書を見ながらゆっくりと教卓の周りを歩いている。その顔をじっと見ていたら何となく親しみやすくとっつきやすい人だなと思え

た。しばらくすると加美さんは黒板に字を書き始めたがその字というのはお世辞にも上手と言うのに骨が折れる程だった。教室中が笑い声でいっぱいになった。すると加美さんも笑い出してその字を消して書き直した。しかし書き直された字は前と変わりがなかった。そこでまた教室中が賑やかになっに「あんまり笑うなよ。初めてなんだから。」と照れくさそうに言った。また、入学して間もなかった我々1年生にとっては面白く、また真面目な感じがして1年生にはもちろん“受け“がよかった。そして3度目の授業は外でのバスケットボールの練習であったボールを持ってコート内に生徒を集め、「これがアンダーパス、バウンズパス、チェストパス、ショルダーパス。」と言いながら説明をしてくれた。説明が終わると我々はパスの練習を1時間続けた。このようにして私達1年生は加美先生の授業を受けたのである。そして教育実習は終わってしまいました。夏の合宿においても私と森田の2人が加美さんに指導を受けた最後の2人にあたり、2・3年生と違って私達はあまり練習を見てもらえなかったが今年は見てもらえるだろうと思って待っていたのに、ついに2度と会えないようなことになってしまって本当に残念に思います。

これまで御指導して下さいましたことを厚くお礼申し上げます。

おわりに

大変日数がかかった割りに上手く出来上がらず　故　加美君、OB諸兄に申し訳なく思う次第であります。学校も多忙とはいえ、生来ののんびりした小生でありお許し下さい。佐久間先生、後藤先生、逆井先生の3先生、ご多忙中稿をいただき深謝いたします。

体操部顧問　　酒巻　敏夫
体操部OB会会長　飯村　文雄

故　林　晃君を偲ぶ

埼玉県立春日部高等学校
体操部 OB 会

はじめに

日増しに文明が発達し私達の生活もいろいろな面でその恩恵を受けております。経済面、交通機関、医学の進歩等数えればきりがありませんが、いずれも人類が研究し続けた結果であり、今後もさらに発展するであろうことは予期できることです。しかし反面、文明の発展とともに私達の生活を、生命を脅かす環境が幾多も生じております。
ある先輩のグループがあり、一同参集したその席での挨拶に「みなさん、交通事故にも遭わず、公害で体をむしばまれることもなく、また癌に侵されることもなくお揃いで・・・」という一節があったそうですが、自ら注意していても危険はすぐそばにあります。精力的でかつ生命力の強さにおいても右に出る者がいないだろうと誰しも認めていた故人でさえ現代の医学の力ではどうすることもできず他界されました。若くしてこの世を去られ、本当に残念です。心からお悔やみ申し上げますと同時に、ここに OB 会関係の方々から原稿を寄せて戴きましたので編集致しました。
　在りし日の故人を大いに偲びたいと思います。

　寄稿者氏名（掲載順）

日本医科大学助教授元体操部顧問		酒巻　敏夫
OB 会会長	（第 5 回卒業）	飯村　文雄
OB 会副会長	（第 6 回卒業）	金子　弘
	第 6 回卒業	坪井　孝夫
	第 6 回卒業	浜野　光男
	第 7 回卒業	岡本　英雄
	第 7 回卒業	高橋　冨士雄
	第 8 回卒業	稲生　均
	第 9 回卒業（同期生）	原　和義
	第 12 回卒業	田中　靖男
	第 14 回卒業	内田　孝治
	春日部高校体操部主将	時田　光昭

林　晃君の横顔

昭和 14 年　1 月　2 日	7 人兄弟の 2 男として誕生
20 年　4 月	杉戸小学校入学
26 年　3 月	同校卒業
26 年　4 月	杉戸中学校入学
29 年　3 月	同校卒業
29 年　4 月	春日部高等学校入学
	入学と同時に体操部へ入部し、勉学に運動に素晴らしい成果を収める
32 年　3 月	同校卒業

40年　4月29日　　3年越しの恋が実り初江夫人と結婚
4１年　6月17日　　長女泉ちゃん誕生
42年　7月27日　　長男淳君誕生
45年　1月23日　　二男智君誕生
46年　8月25日　　力瞭もむなしく東京大学病院にて32歳の生涯を閉じる

栄光のあと

昭和30年度（高校2年生）

学徒総合大会　団体5位
関東大会出場（千葉）
全国大会出場
県民体育大会　団体6位
第10回国民体育大会出場（神奈川）

昭和31年度（高校3年生）

学徒総合大会　団体2位２８０．９０
個人総合1位103．25
徒手、平行棒、吊り輪、鞍馬に優勝
鉄棒2位、跳馬4位
関東大会連続出場（埼玉）団体11位
徒手3位、吊り輪6位
全国大会連続出場
県民体育大会　団体2位376．80
個人総合1位１０５．００
徒手、鉄棒優勝、
平行棒、吊り輪、跳馬2位
鞍馬3位
第11回国民体育大会出場（兵庫）

故　林晃君と私

春日部高校教諭　酒巻敏夫

2年連続して国民体育大会、全日本高等学校体操競技選手権大会に出場した。強靭な体躯と不屈の斗魂を持った晃君が病に倒れ、この世を去るとは思いもしなかったことである。科学が如何に進歩した現代とは言いながら、現代医学の不可解な病で亡くなるとは晃君の全生涯とは考えながらも、思い切れない悲しさがある。

晃君を私が初めて知ったのは、渡辺（当時2年生、杉戸の住、現在読売新聞販売店主）から「杉戸中学の3年生に林という選手がおり、春高を希望している。」とのことで、県民体育大会の機会を利用して練習中の晃君に会った時である。小柄な、色白な、目のクリクリした中学生であった。私の目に素質十分な選手と映ったので、思わず「しつかり勉強して春高に合格しなさい。」と言った。晃君はニコリともせず、低いがはっきりした声で「はい！」と言った。言葉を交わした初めでもある。

4月の入学式が過ぎたある日、私が練習に出ると渡辺が「先生、杉戸中から林が入学し、今日入部しました。よろしくお願いします。」と紹介してくれた。この日から晃君の体操部員としての生活が始まっ

た。当時、春高体操部の第1次黄金時代を築くべく張り切っていたときだったので、1年生の晃君はそれは苦しい練習の日々だったと思われる。この年はすべての県内大会に優勝し、関東大会（水戸会場）第5位、全国大会（大阪会場）第11位だった。私は将来を楽しみに、晃君を大阪の大会に同行させ大会の雰囲気を体験させた。

2年生にして選手となり、果たせるかな国体選手埼玉県代表となった。当時、体操競技では埼玉県で珍しいことであった。中学時代に県下では無名に等しい晃君が、わずか1年余の練習でよくも県下の3年生の強豪を倒したものぞと感心した。3年生でも栄えある国体選手として出場し、また全国大会でも快心の成績を挙げた。晃君は特に徒手（現在は床運動）に美技を発揮した。晃君が徒手を演技するときは大宮県営体育館が一瞬水を打ったが如く静まり、衆人の双眼が晃君の一挙手一投足に注視され、終了と同時に体育館が破れんばかりの大拍手、その演技を何の心配もなく安心して見守ることができた私は幸福であった。

体操競技会の人気は勿論のこと、春高生にも人気があった。運動部の予算獲得のときも晃君の発言で体操部の部費が増額したなど、その一例に過ぎない。大学に進学し体操競技に専念することを奨励したが、家業（米菓業）に従事するとのことで私は断念しに卒業式には体操競技で優秀な成績を挙げ、春日部高校の栄誉であるとして特別表彰を授与されたことも忘れられない。このときの賞状と副賞が晃君のお宅のどこかにあるはずである。当時、私は春日部市樋籠の田中氏宅に借家住いをしていた。六畳二間勝手付きの離れ屋であった。愚妻と二人暮らしの家に、晃君を主将として春秋の2度合宿、たぶん12人か13人いたと思うが。晃君を先頭に激しい練習に日を送った。愚妻とマネージャー（菊田）が食事の世話で大あわてしたのも思い出の一つである。

卒業後家業に専念することになり、毎日の奮斗が合宿中（後輩の合宿）せんべいを両手に抱えて後輩を激励した折や拙宅によく遊びに来た晃君から伺えた。ある夜、突然同級の原（三越勤務）と一緒に来宅、何故か浮かぬ顔であった。たぶん、夕食が終わっていたので8時過ぎの時刻と思われる。「相談に来ました。」とぶっきら棒に言った。それは取引先から巨額な不渡りを受け家業を継続するのも困難であり、ここで就職したいが私の考えは如何ということであった。すでに原とは相談したが、一応私の考えで決めようとしていることがわかった。思いもよらぬ難題で一時迷った。しかし私の性格から「不渡りを出したのは相手であり、君は被害者である。君が不渡りを出したのなら話は別だが、これに屈してはならぬ。家業とともに死ぬ覚悟でもう一度頑張れ。練習のあの苦しさに耐え、なぜこの苦しさに耐えぬか。君が一歩後退することによって、家業も一歩後退するものだ。君がここで頑張ればこれ以上困難になるまい。ただ前進あるのみ。販売ルートは幸い原が三越にいるから、大いに利用すべし。」と言ったことで晃君の迷いが解け、1泊しで帰った。卒業後初めての世の荒波を経験したことであったろう。後、来宅。あのとき職を変えないでよかった、何とかなりましたとのことで、私は気楽に晃君の苦心談を聞いたのも思い出の一駒である。

借家生活から妻の祖父と同居することになり現在の家に移ることになった。晃君と渡辺が1日がかりで引越し荷物を運搬してくれた。多忙な2人が暇を見つけてのことであった。私は勤務があったので夕刻帰ってみると晃君愛用のトラックが庭先にあり空であった。部屋に入ってみるとほとんどの荷物が整理されてあり、住みやすいようになっている。このときほどありがたかったことはなかった。十余年前の思い出である。この時点から師弟の関係は全く逆になり、以来私が世話になることになった。

あの年の正月、着物姿で来宅。正月のこととて顔が赤らんでいる。年頭の挨拶が終わっても何だかそわそわしている。はにかみながら小指を出して「車の中にコレがいる。」と言った。珍しいハニカミようであった。（当時はあまり飲酒運転はうるさくなかったのだろう）結婚しようと思うが、先生の意見を聞きたいからぜひ会って欲しいとのことであった。早速、晃君の意中の人と面談。実に鴎がよく、美人で情の

細い人と思えたので「OK」を目でサイン、そのときの晃君のあの希望に燃えた笑顔が目に浮かぶ。この美人こそ奥様である。まもなく結婚式3私も杉戸・高橋屋で祝辞を述べさせられたが、何をしゃべったのか忘れてしまった。強烈な仲睦まじい二人三脚が出発したことにより、さらに林米菓店は隆盛の一途をたどった。

正月3日は例年体操部OBが拙宅に集まって飲み、話し、笑って1日を過ごしている。本年(19 7 1年1月3日）正月は拙宅でも金子(OB与野市で歯科医開業）の家でも飲み過ぎで苦しいと好きな酒を一滴も口にしなかった。晃君の運転で帰路についたが、久方ぶりに私の子供に会って下さいとのことで晃君の宅へ直行。奥様と3人の愛児に対面した渡辺･原と私は時の経るのも忘れ、飲みかつ話した。この日、晃君の音声はかすれ、いつもの晃君とは思えなかった。この日、正月3日が歩行している晃君、愛車運転する晃君と私の会った最後となった。3月頃、子供だけの拙宅に愛児を連れて来宅してくれたようだが、愚妻と雑用で出かけたときだけに残念だった。

6月のある日、晃君の実家に立派な皐月があるとのことで（私も皐月が好きである）日曜日に妻と鑑賞させてもらうべく電話をしたところ、最近腰の痛みが激しいので鹿沼市（栃木県）の御殿山病院がよいと聞き、昨日凡浣して不在とのことであった。あわてて渡辺に電話したところ、杉戸町内に住みながら知らなかった。腰が痛むだけと安心して誰にも知らせず入院したらしい。後日、渡辺の運転で見舞いに参上した。晃君と奥様から病状を聞き、もしや骨肉腫ではないかと一瞬、脳中を走った。2度目には晃君が「どうも椎間板ヘルニアでなく、外の病気らしい。」と言われたときは胸を刺された如く「ドキリ」とした。それまで渡辺から晃君の病状を詳細にわたり、電話で報告されていたからである。この日はOB諸君と伺った日である。現代医学で不可解の病であることを知らせることのできない私は苦しかった。

若くして世を去った晃君、奥様と3人の愛児を見守って下さい。そして生前存分にできなかった旅行やゴルフをあの世で心ゆくまでやって下さい。晃君と私についてまだまだ山ほど書きたい。

奥様に

晃君のため不休不眠の長い看病生活、誠に御苦労様でした。晃君は奥様との楽しい生活を夢見ながら、そして感謝しながら遠い世界に旅立たれたことと思います。

どうか健康に十分留意され、晃君の大切な宝である3人の愛児を、健やかにお育て下さい。例年のOB会には晃君と同じように出席して、お子様の成長の様子をお聞かせ下さい。苦しいこともあるでしょうが頑張って下さい。

故　林君を想う

OB会会長（第5回卒業）飯村　文雄

「人生これからだ」という大事な時期に、短い闘病生活であったが周囲の暖かい激励の看護もむなしく、この世を去った。

「俺はまだまだやることがたくさんあるんだ。負けてたまるか！」こんな声が聞こえるような気がする。さぞ無念であったろう。

我々体操部OBの中で、張りある人物を3人も失った。人生無情を身近に知った。実に悲しいことである。

ふと日常生活を考えるに一健康一という言葉が浮かぶ。実社会で活動していると自分の行動が周囲の状態により押し流されて相当に無理を強いられ、疲労の回復が間に合わない。つまり健康状態に悪化現象を起こす。たとえ運動などで鍛えたとはいえやはり生身の体には限度がある。周囲の如く世の動きが緊迫

し、ややもすると危険状態にさらされる中で私たちは生活をしている。不可抗力的な立場であっても健康過信のないようにお互いに充分に注意すべきではないか。

ご遺族の方々には誠に悲しい出来事だが、あえて確固たる気持ちを取り戻し今後の生活に精進されることを祈る。

衷心より故林君のご冥福を祈る。

林君を偲んで

OB 会副会長（第 6 回卒業）金子　弘(S29 年卒業)

生者必滅会者定離は浮世の掟とは申せ、まさか君が不帰の人となろうとは、誰が想像したであろうか。私の不在中何度討酉巻先生と渡辺君より電話があり、しばらく OB 会も開催していないのでその催促ではないかと思い乍ら電話したところ、君は不治の病に侵され、なすすべもないと聞かされ、ただ茫然としてしまい何かの間違いではないかと何度も聞き返してしまった。しかし現実は冷たかった。それから 1 か月、君は本当に黄泉の国の人となってしまった。

仏光円かに照らして黄泉の途恙なく
冥闇を十方に聞いて再び覚苑の春を現ぜん

1 月 3 日、私の事故の見舞いに来てくれたとき、今考えるとどことなく元気がなく料理も全然箸をつけなかったね。そのとき私は 4 日前に週浣したばかりで自分の事だけで精一杯であったし、正月でもあるし多分飲み過ぎて宿酔にでもなっていると思っていたのだが、そのときすでに病魔に侵されていたのですね

初めて君と会ったのは 1 年生の夏休みの練習のときだったね。にこにことして軽く頭を下げ、恥ずかしそうに目をそらしたときの君の顔が今でもはっきりと瞼に焼きついています。大阪でのインターハイのとき、酒巻先生の代わりに監督として 1 週間生活を共にしましたね。卒業後は OB 会といえば忙しいにも拘らずいつも率先して先輩後輩の面倒をよく見てくれましたね。稀には脱線して便所と床の間と間違えたこともありましたね。ゴルフも一度原君と 3 人でやったことがありましたね。体操と同様上達が早かったですね）帰りに私の家でキュウリのピクルスが旨い、旨いと言ってよく食べていましたね。いつまで話していても君との思い出話しは尽きることがありませんが、願わくはもっと将来のことを話し合いたかったですね。君を失ってしまったのは本当に悲しい。そして淋しい。

林君の霊の在天に安らかなるを祈ります。

生者必滅の理　会者定離の掟
老少は不定なり　富貴は夢の如し
紅顔忽ち草葉の露と化し
白髪虚しく野辺の煙となる
嗚呼誰か百年の齢を保たんや

合掌

林君へ

第 6 回卒業坪井孝夫

君のようにたくましくて
　　ほがらかで剰軽で
酒をうまそうに飲むヤツが
　オレより先に行くなんて考えられない

でもそんな君のことだ
　きっと三途の河原で鬼どもを集め
　　酒盛りしながら
　例によって爆笑させていることだろう
OB のオレもいつか後から行くから
　大いに売り込んでおいてくれよナ。

故林晃君の思い出

第 6 回卒業　浜野　光男

「死というものは時がたつにつれ薄れるというものではない。告別式当日よりは却ってそのあとに訪れる空虚と悲しみが一層堪え難く深いものがある・・・」と何かの本で読んだ記憶があります。ましてや夫を亡くした初江夫人にとってはいかばかりかと私自身微意ながらも推察申し上げます。故林君の死を信ずる者は誰一人としていなかったろう。しかし間違いなく林君はこの世の人でない。数多くの人々に惜しまれながら現代医学の進歩もおろか、不治の病癌との長い闘病生活に打ち勝てずわずか 32 歳という生涯にピリオドを打ったのである。ご冥福をお祈り申し上げます。

故林君の思い出は尽きせぬものです。私の後輩として春高体操部に入部され現在まで誰も為し得なかった国体出場 2 回という実績は、林君以外に誰ができただろうか。春高体操部の謳歌はその時にあった。しかしそこには故林君を人一倍激励していた恩師酒巻先生をはじめ OB 会を忘れてはならない。また、個人的なことだけを考えるような視野の狭い林君ではなかった。チームリーダーとして常に積極的に部員を統率し、チームとしても好成績を残せたのは林君の人格と統率力があったからでしょう。社会人となってさらに充実した感がある。察するところ特に外交面において群を抜き、彼の持ち前である努力と執念の結果が現在の家業の主流を支えてきたようです。仕事の厳しさをしっかりとらえ、先輩後輩をわきまえしかも友情あった故林晃君は OB 会その他の会合に必ず顔を見せ宴を賑わしていた。その林晃君は過去の人となってしまった。しかし春高体操部 OB 会のあのスマイル林は私のアルバムに永遠に生きていることでしょう。

林晃君の霊に捧ぐ

第 7 回卒業　岡本　英雄

我が春高体操部史上に輝く巨星がまた落ちに弱冠 32 歳、いかにも若すぎるのではないか・・・。それも今はやりの事故ではない病魔に侵されたのだ。君は持ち前の努力と忍耐力をもって邁進してきたのに、病魔には勝てなかった。無念であろう。現代の医学はまでそこまでいっていなかったのかと腹立たしく思います。今から 20 年前に不世出の名馬として君臨したトキノミノルという馬がいたが、日本競馬会 3 大レースのうち 2 つまでを獲って、さてという時逝ってしまった。太く短く生きたわけだ。だがその名は後世までも語り継がれ永遠に残るでしょう。君を馬に例えたわけではありませんが、君のそのロマンに満ちたそして波瀾万丈の生涯を顧みるとき、何かそんな思いがします。林晃君あとのことは心配せず、安らかに眠って下さい。

故林君を悔んで

第 7 回卒業　高橋　富士雄

君を知ったのは 1 年に入学し体操部に入部してからですが、私は 3 年生でしたので一緒に練習したのは 1 年間でした。しかし彼は非常に真面目な、体の柔軟な色白の少年だったことを覚えています。その後努

力が実り、2年、3年と全国大会に出場したことを聞きました。また卒業後もOB会には毎回出席され、いつも明るく朗らかに語りそして歌い、主役の座についておりました。8月のある日、渡辺君より話があり驚いて見舞いに行きましたが、その後2週間もたたずに亡くなろうとは思っていませんでした。若くして亡くなられた林君の冥福を衷心よりお祈り致します。

林よ安らかに眠りたまえ

第8回卒業　稲生　均

林晃君とは卒業後よく渡辺茂さんと一緒に杉戸や野田で飲んだものです。在学中の活躍は県が違うのでほとんどわかりませんでした。ただ一度僕は県大会だと思うのですが、見学に行ったことがあります。あの時林君が後方宙返りを体をよく伸ばしてやっていたのを見ましたその当時は高校生ではなかなか見られなかったものですから観衆はみんな一様に驚いたものです。不思議なものでそのときのことはこれしか覚えていません。チームの順位が何位で、林君の成績がどうなったかも覚えておりません。それからOB会には初めのうちはよく出ましたが、最近はほとんど出ませんでした。それが思いもかけず酒巻先生から突然7月23日に電話で呼び出されました。初めはただ「俺だ、俺だよ。」としか言わず、名前を言われてやっとわかりました。「林が入院している。今晩渡辺茂さんが来ているから、できたら来てくれ。」とのことでした。たしか岩槻の“ほてい家’で塚脇さんの色紙をもらったときのOB会以来お会いしていませんでした。そして電話番号もわからなかったのにわざわざ電話して、何のわだかまりもない先生でした。すぐ先生のお宅に駆けつけました。曾根も来ていました。林の病状を聞かされました。病名が信じられませんでした。特にこの病気は原因がわからず現代医学ではまだ治療方法がないとのことです。なぜそんな病気にかかったのか、まだ若いのに年寄りがなる病気ではないか。まして林は稼業の手伝いをして、聞くところによると再建して軌道に乗って飛躍しているところというではないか。そんな馬鹿なと内心思いました。翌々日の日曜日、入院先の鹿沼の御殿山病院に先生夫妻、先輩と見舞いに行きました。（林は初め腰が痛いので椎間板ヘルニアではないかとこの病院に入ったそうです。）僕には変わって見えませんでした。昔の林です。だが会った途端涙が出そうになり、言葉も出ませんでした。両足がもうきかないそうです。侵されたのでしょうか。話すことは骨が折れるでしょうが、できます。時々すごく痛むのだそうです。さすってやるといくらか安まるようです。ちょうど子供も来ていましたが、まだわからず無邪気なものです。奥さんはずうっとつきっきりだそうで、安まるときがなく大変ですがよく尽くしています。本人は手術をしてくれないので不審に思っています。病名も教えられない奥さんはどんなにつらいことでしょう。あとは林の頑張りを待つだけです。8月に入って渡辺茂さんに電話して、その後の状態を聞いたところ東京大学の大塚分院に入院したそうです。一時は車椅子に乗って元気になったとのことでした。できたら見舞いに行ってくれとのことでした。都合よく22日に行くことができました。前日から酸素を補給しているそうです。眠るときでしたがわかったようでした。僕は林が眠るのではないかと話しをしませんでした。足を何度もさすってみましたが、何ら普通の人と変わりありませんでした。今日は岡本さんも見えたそうです。この次話しをすればと声もかけずに帰って行きました。それが翌日から意識不明となり、こんなにも早く亡くなるなんて誰が想像したでしょう。惜しい人ほど早く逝ってしまうなんて世の無常を嘆かずにはいられません。体操部にとっては何の因縁か、3人までもが逝ってしまった。特に林はOB会には毎回出ていて付き合いを欠かしたことがないそうです。合宿にも行ってコーチもよくしたそうです。お通夜にはOB会にも集まったことのない人数が集まりました。林の人徳のおかげでしょう。これを機会といっては林にすまないが、僕はOBに欠かさず出席します。そしておこがましいが奥さん、子供たちを見守ってやりたいと思います。

林君を偲ぶ

第９回卒業　原　和義

今思いますに林君との出会いは杉戸小学校のとき、１年生で席を隣りにしたことがあったと後で母から聞いたが、しかし一番親交を深めたのは高校３年間の体操部時代ではなかろうか。あの暑い太陽の照りつくグランドの３年間の高校生活、また我々は部員数の関係から２年生から試合に出場させてもらったが、一同林君を中心に練習に励んできました。あの当時、林君はあのファイトで常にリードしてくれ、私としては結果はともあれ悔い無き高校生活を送れたと思う。これも先輩はもとより、林君の体操部に対しての強い情熱と努力がそうさせたのではないかと思う。

思い出すに卒業後２年程して家業を継いだ林君が商売上のことで思わしくなく、一度訪問されたとき「俺は船乗りになりたい。」と言って家業を継ぐ自信がないようなことを言ってきた。私には判断ができないので酒巻先生の自宅を訪問したことがあったが、当時の林君を思うと彼自身が一番予期しなかった事件が起こったように思われた。しかし私は、ファイトマンの林君がこの程度のことでくじけるとは思っていなかったし、その苦をものともせず現在の林屋米菓を築きあげたその努力に敬服に堪えない次第です。

林君が初江夫人と結婚する前によく先輩の渡辺茂さんと酒宴を共にしたが、冗談に言う彼の言葉が後日商売のうえで完全に生かされていたことは彼自身の苦労と経験の場ではないかと思う。３ヶ月前東京で商売上のことで会った時、今後の抱負を語り私自身今後の発展を楽しみにしていたのにあれが元気な林君との最後になるとは・・・。全く、貴重な人物を亡くしてしまい心から残念に思う。

しかし林君は短い人生であったが、我々にできない２倍も３倍ものことを成し遂げ、我々に貴重な教訓を残してくれた。今後先輩後輩共々肝に銘じ頑張る覚悟です。

林君後のことは心配せず安らかに眠りたまえ

林さんを偲んで

春日部高校体操部顧問　田中　靖男

林さん、先輩との出会いは合宿の時でしたね。先輩のことはよく酒巻先生や上級生の方からも耳にしていました。

合宿で心身とも疲労しきって、みんな早く合宿が終わればと祈っているそんな時、ニコニコ笑いながら顔を出したのが林さんで、今でも強く印象に残っています。小柄ながらがっちりした体格、それに何となく接しやすい感情を私達に抱かせてくれました。それに、来るときは必ず煎餅を差し入れてくれ、水を飲みながらボリボリ食べたあの休憩時間は合宿の数少ない楽しみの一つでした。そんなわけで合宿に入ると林さんが来るのを楽しみに待っており、必ず期待に応えてくれ、大きな缶に時には大きな紙袋に私達はどんなにか励まされたことでしょう。でも練習には厳しく甘い顔も見せず遠慮なくしぼってくれました。先輩は現役の時、全国大会や国体に２年連続で出場しておりますが、そんな厳しさがあの偉業の大きな原動力になっていたのでしょう。

こうして知り合い、その後 OB 会で一緒に飲む機会も多くその都度林さんの幅広い性格に感心させられました。聞くところによれば事業の方が一時はきわめて苦しい状態に追い込まれ、非常に苦悩されたとのこと。しかし持ち前の強靭な精神力でものの見事に苦境を切り抜け事業を軌道に乗せたそうですが、仕事に対し他人が真似られぬほどの熱意と厳しさを持つ反面、明るく冗談を交えながら誰とでも接し、特に後輩思いでもありました。だから私達にとって、また現役の部員たちにとっても林さんの存在が大きな励みでもありました。その林さんが現代の医学ではどうすることもできなげ病魔にとりつかれるなんて考えて

もみませんでした。医学の進歩と共にこの難病もやがて克服されるでしょうが、よりによって林さんが・・・。

運命としか言いようがないのかもしれませんが何としても残念でなりません。でも先輩は私達以上に残念だったでしょう。人に言えぬ苦労をし、今日の林屋米菓を築きあげ、これからという時に。そして奥様にもお子さまにもしてあげたいことが山ほど残っていたでしょうに。

林さん、どうぞ安らかにお眠り下さい。そして昼夜の区別なくあたたかく看病なされた奥様と林家の宝でありお父さんが元気になることを信じ切っていた3人のお子さまの健康と成長を遠い別世界からいつまでも見守っていて下さい。先輩の意は奥様に、そしてお子さまにきっと生き続けることでしょう。

最後に、奥様どうかこの衝撃から一日も早く立ち直り、ご自身の健康に留意されるとともにお子さまを元気に育てて下さい。

林先輩を偲んで

第14回卒業　内田　孝治

我々が林先輩と会えるのは強化合宿の時が多かった。早くから部のマネージャー役をしていた私は、合宿の前になるとOB諸兄へ合宿の案内状を発送する仕事があった。何通もの案内状に宛名を書き込みながら、今度は何人の先輩が練習を見に来てくれるだろうか？と期待を胸に膨らませたりした。先輩たちは後輩の練習を観察し、その未熟な技に対しては常に厳しい批評と指導をしたが、汗を流した後のくつろいだひとときにはまずい合宿の飯を分かち合いながら、愉快に談笑したり時にはしょげかえっている部員に優しい言葉をかけてくれたりした。

その頃から数多いOB諸兄の中で案内状を差し上げると必ず八木崎原頭に姿を見せてくれるのが林先翡であった。陣中見舞いだと言って携えてきた手土産を合宿所に置くと、自ら練習着に着替えて部員と一緒に器械にぶらさがっていた。卒業して年月を経たにもかかわらず現役の部員に劣らぬ柔軟な肉体でダイナミックな冴えた技を次々に披露してくれる。その当時の林先輩の退しい姿が今も私の脳裏に深く焼きついていて、かの人が病魔に屈して今は亡き人となってしまったとはとても思えない。

私が在部していた頃は、野口、田中氏らが築いた優勝への足がかりを受け継いで、部員の数、質ともに充実の一途を邁進していたと言っても過言でない程、春高体育館のなかでも活気に満ちた部の一つであった。斉藤、大高、中村（靖美）、池田、それに1年後輩だがギリシャ神話のヘラクレスを思わせるような怪童中村武と強者どもが揃っていた。宿願の総合優勝を果たすべく、毎日の厳しい練習に加えて春夏冬の休みはもちろんのこと、大会が間近に迫ると休みでないときも強化合宿を行って部員の技の錬磨にいそしんでいた。顧みると合宿また合宿で明け暮れした高校生活であったようだ。

そうした度重なる合宿に欠かさず姿を見せ、我々を励まし指導してくれたのは他でもない林先輩だった。今自分が社会人となってOBの一員に数えられるようになっても、仕事の都合、勤務地の遠さなどの理由でなかなか母校の体操部を見に行くことができないが、先輩が多忙な仕事の合間をぬって後輩の指導にやってきてくれたのは大変なことだったのだということを今さらながらに痛感させられる。大会の時なども大宮のスポーツセンターの片隅でじっと後輩たちの演技を見守ってくれていた。私達が先輩に対し返し得たものは、学徒総合での優勝、関東大会出場、秋田国体出場、インターハイ出場などであったろう。

かれこれ一昔前の思い出で、林先輩ともその後お目にかかる機会がなかったが、偉大なOBを失った悲しみの報に触れ、在りし日の先輩の姿を偲んでみた。

昭和46年9月1日　京都にて

先輩を偲んで

春日部高校体操部主将　時田　光昭

このたび林先輩が亡くなられ心からお悼み申し上げます。我々は林先輩にはお会いしたことこそありませんでしたが、先翡の高校時代における活躍について数々の話を伺い、ぜひ一度お目にかかりたかったです。一度でも先輩の演技を見たかったと残念でなりません。30代の若さでこの世を去られた林先輩。まだやりかけていたことや、これからなさりたかったことも数多くあったことと思います。もしかしたら来年我々の合宿にお菓子をたくさん持ってきて下さったかもしれないのに、もうそんなことも考えられなくなってしまいました。昭和30年当時、また設備も整っていない学校で体操に青春を打ち込んだ先輩、その先輩の残した立派な成績と体操部の伝統を引き継ぎ、我々も先輩に劣らぬ努力をしていきたいと思います。

私達の活躍をいつまでも見ていて下さい。お願い致します。さようなら。

雑記

追悼集作成に際し、ご協力戴きましてありがとうございました。特に御多忙の折、そして短期間であったにもかかわらず寄稿下さいました方々に厚くお礼申し上げます。お陰をもちまして完成致しました。編集が不慣れのため、ご期待に添えない点も多々あることと思いますがご了承下さい。また短期間の編集で充分な校正もできませんでしたのでご迷惑を掛けるかと思いますが、この点もご了承下さい。

発行所
埼玉県立春日部高等学校　体操部OB会
昭和46年9月26日
編集責任者
OB会会長　飯村　文雄
事務取扱　田中　靖男
印刷
東武タイプ印刷

故中村武君を偲ぶ

埼玉県立春日部高等学校
体操部 OB 会

あれから早くも１年あの日のあの悲惨な事件は一応解決はしたもののその後日本中どこかで同じことが起こっている。その度に鮮明にしかも深く脳裏に刻まれたあの事件を思い出し暗い気持ちに追いやられる。社会の悪に倒れる人の何と多いことか。

また失われた人の代償がいかに大きいかを痛感する。そんな悪を恨みながら在りし日の武君を偲ぶ意味で OB 会会員が寄せたものを編集致しました。

追悼集にしましては不出来ですが、在りし日の武君を大いに偲ぼうではありませんか。

寄稿者氏名

OB 会会長	飯村　文雄
体操部顧問	田中　靖男
１３回卒	平原　英雄
１５回卒	山崎　哲夫
１７回卒	関口　文夫
１８回卒	西川　求
２０回卒	宮沢　静雄
２１回卒	富田　静雄
現役	遠山　信二
現役	川村　直人

中村武君を悼む

OB 会会長　飯村　文雄

十年余り前のことであろうか、私達は会員の一人を失った。体操の非常に好きな男でまた素晴らしい技術を持っていた彼は列車事故で若い命を落とした大学卒業後教員となって間もなくのことであった。事故の多い世の中ではあるが、私達の仲間から犠牲者が出ようとは・・・。これからという若い有能なる指導者を失ったあの時、もう私達の仲間は失いたくないとつくづく思った。しかし十年後またしても仲間を失った。しかも今度は凶悪な犯人によってその生命を絶たれた己の目先の事だけを考え他の人はどうなっても構わない、自分さえよければ人の命など虫けら同様にしか考えない犯人、そんなそれ位の考えきり持てない犯人に殺された武君は全く浮かばれないだろう。

武君と私は年代もだいぶ離れており一緒に練習をしたことはなかったが、彼の素晴らしい活躍は私達の年代に十分に浸透していた武君の体操への情熱が春日部高校在学中に実り、県大会、全国大会、国体にとその活躍には目を見張るばかりであった特に吊り輪における技術は無類の強さがあり一番記憶に残っている。その後埼玉大学に進み、ここでも体操の虫となって活躍、教員になってからも国体で活躍している情報が次々耳に入り全く頼もしい限りであった。中でも埼玉国体では優勝の大きな力になった旨を聞き、私達も胸を張って歩いたものだ。武君の不屈の精神と体操への憫熟が、ここまで成長させたのだろう。そんな彼が狂人の凶器に倒れようとはまだ結婚生活間もないとか。若いそして有能な指導者を私達はまたしても失った。無限の可能性を秘めた人間を永遠に失ってしまった。犯人が全く憎いがもう元には戻らない。

武君　どうか安らかに。

武君！やすらかに

体操部顧問　田中靖男

悲報、こんな悲報がまたとあるだろうか。“武君夫妻が鈍器のようなもので頭部を激しく打たれ、息絶え絶えのところを発見された”との記事が各紙に一斉に報道されていた。我が目を疑い何度も読み返したが間違いではなかった。だがあの武君がと思うとどうしても信じられなかった。病院へ行き、頭部の切開手術をし意識不明のまま酸素吸入を受けている武君を見たとき、初めて間違いではなかったことに気づいた。

武君とは教員仲間でもありつい先日も会ったばかりだった。まさかこんな姿になろうとは・・・。武君に初めて会ったのは彼が高校へ入学する前だった。夏休みに練習をしている私達のところへ来て一緒に練習したことがあった。そのとき武君は中学の３年で春日部高校入学を夢見ていたときだった。小柄ではあるが肩幅が広く全体的にがっちりとした体格が印象的だった。それに掛けていた眼鏡も何となく印象に残っていた。

その翌年、念願の春日部高校に入学した。しかし私達が卒業したときであったので当時は武君とそれ程接触することはなかったが、彼の活躍には素晴らしいものがあった。武君の持って生まれた才能は３年間に思う存分に発揮された。当時顧問をなされていた酒巻先生の指導のもとに、彼の体操に賭ける異常なまでの情熱と不屈の精神力とが技術の向上に繋がり彼を大きく成長させ、また春日部高校体操部躍進の大事な布石となったのである。武君のこの高校時代の大きな躍進が結局彼を体操界に深く踏み込ませる要因となり、埼玉大学進学後もさらに精進し埼玉大学のエースとして活躍、ついに埼玉大学の黄金時代を築くに至ったのである。そして卒業後教員となり上尾中学に奉職する傍ら体操での活躍は全く見事であった。多忙な時間を工夫して練習したその成果はなんと無名の埼玉を一躍“体操王国”に引き上げてしまったのだ。まだ記憶に新しいことではあるが、低迷していた埼玉の体操が埼玉国体、福井国体で一躍頂点に達した大きな原動力の一つに武君がいたのだ。武君の自分に対する厳しさが彼をこんなにまで成長させたのだと思う。

しかしそんな厳しい性格を持っている反面、ユーモラスな性格も持ち合わせていたし、やさしさも持っていた。だから年配の人たちから可愛がられ多くの同僚と付き合い、たくさんの後輩や大勢の生徒から慕われていた点でもよく理解できる。こんなに幅広い人たちから親しまれた武君を呼ぶとき、みんな“プーちゃん”の愛称を使った。彼の人間性を上手に表現した愛称ではなかろうか。だが、不屈の精神力を象徴するかのようなあの頑丈な体も狂った犯人の凶器にはとうとう勝てなかった。と言うより武君だからこそそこまで生命を保てたのだろう。生きているのが奇跡だと医者が驚いたそうだが、それ程まで強い生命力を持っていた武君、その支えになったのはやはり体操で得た精神力ではなかったろうか。１ヶ月近くも意識不明のまま頑張り続けた。全力で闘い続けたが意識は永久に覚めなかった。犯人が上尾市内で捕えられて間もなく、あたかもこの時を待っていたかの如く、超人的な生命力もついに絶たれた。

単純な動機で生命を絶たれた武君、さぞ悔しかったろう。まだまだすることはたくさんあったろうに。君の手で社会に巣立ち行く生徒、限りなく生徒はいるのに・・・。こんな最後で全く無念だったろう。全く浮かばれまい。ただ武君、君にとっては終始傍を離れず悲しみと不眠とで眼を真っ赤にしながら看病を続けたお父さん、お母さんと兄妹の一家揃っての温かい手が、それに何もできないでただひたすら回復を祈り続けたたくさんの生徒の声が、せめてもの救いとなったのではないだろうか。

中村君を想う

山崎　哲夫

私と彼との出会いは、ちょうど今から十年前の初夏であった。蝶々が飛び交い、少しばかりの雑草が生えていた。春日部高校中庭では今しも体操部の練習が始められていた。そのときの種目は鉄棒、一本の鉄の棒を中心として展開される妙技に当時の私は驚かされた。翌日入部し、そのとき同じ新入生でありながら期待の大きな中村君と出会った。以来3年間彼と私はいつも行動を共にする事となった。当時の私達は同期の桜というよりも、むしろ一つのことにこだわる事なくいつも積極的に考え行動し、互いの心の中を知ることができた友人として精神的な結びつきの方が強かった。それもそのはずで彼と私とでは、体操の演技上技を競うなどという、言わばライバル的な関係は成立しようがなかった。彼の天才的な要素と後天的な努力の結晶とでも言うべき演技は決して私達の真似のできるものではなかった。それ故、一層気が合う時は遊びの時であった。彼はクラブ活動がすべての、堅物かと思えば決してそうではなかった。美的センスもよくわきまえていて服装等についても常に気を配っていた。当時高校生の流行は体にピッタリと合った服装がよしとされていた。彼と私はよく秘かに春日部市内にある洋装店に通い、ズボン等の改造を依頼していた。彼は3回もやり直しをさせる程熱心であった。そのようなことからユニフォーム等のデザインに関してもなかなかうるさくその良し悪しにつき討論することもあった。また自由種目における演技の組み方等に関しても熱心に1人1人に付いて、より美しいフォームのために指導したりもした。しかも彼は決して外観的な形式を重んじる人間ではなかった。あるとき同級生で体操部のマネージャーをしていた友人が、今流行の言葉で言うなら親と子の断絶とでも言うべき現象を引き起こし、学校には姿を見せず家にも帰らないという事件を起こしたことがあった。当時体操部の顧問をしておられた酒巻先生も大変心配した事であったが、中村君と私は早速彼の家を訪問することにした。地元の駅に着いてみると当の彼が迎えに来ていた。およそ20分程バスに揺られ彼の家に着いたとき、私達は彼の父親からいきなり怒鳴られるハメになった。お前たちもこの馬鹿息子の仲間か！と言うのである。そのとき、私は必死で弁解することを考えたが中村君がそれを止めた。父親の前ですっかり馬鹿息子の仲間になりきった中村君は彼の心の中深く忍び込んでいったのである。また、あるとき埼玉大学は一部左翼系の学生の乱闘騒ぎがあった。そしていつもそれら学生と運動部の学生による対立は起こった。対立が激化するにつけ彼も悩んだのである。相談を受けたときの彼の言葉を覚えている、「あんなのは破壊の青春だ！思想などというものはもっと建設的なはずだ！あれが彼らの青春なら、あくまでも対立するのが自分の青春だ。」そのように常に本質に迫ろうとする態度は彼をしてより偉大なる人格へと成長させていった。将来の命として自らを教師という至難の道を選んだ私のよき理解者、彼は一体どこへ行ってしまったのか？私にはわからない。病む現代社会自身のジレンマとして新聞紙上を賑わし、それにより一応社会正義や人命尊厳の名目は保たれたかもしれぬ。しかしそれにより救われた者は誰もいない。私は彼の冥福等祈りたくない。中村君、君のその逞しい肉体と精神力で今一度生き返ってきて欲しい。それによって君自身の生命もすべての人々の生命の尊さが意識され、君の死も人命を軽んじる現代社会の罪ほろぼしとして初めて贖われることと信じる。君は酒もタバコもあまりやらなかったが、飲んでもいいからもう一度一緒に食べながら話しがしてみたい。

「中村武君の思い出」

平原　英雄

今こうして指折り数えて何年くらい前になるのか覚えていない。私が春高２年、秋の試合も終わり部員一同これから来春の学徒総合大会めざして猛練習している丁度その頃だった。高校個人総合６位、中学生６位までの代表選手による模範演技が大宮スポーツセンターで行われたことがあった。わが春高からは個人総合２位だった野口主将が出場していた。野口先輩の言うことには「来年、春高の体操部に幸手から中村というのが入るんだけど、中学生の代表で出るからよく見ておけよ。」と言われた。“中村武”という名を聞いたのはこれが初めてのことであった，丸いメガネをかけたおとなしそうな中学生という感じであった。確か跳馬の演技をしたように思う。中村君が入部し部室に来て初めての練習日に、１人で“吊り輪“に軽々と上へあがったのには部員一同驚かされた。私が見聞きした範囲では、吊り輪に初めて飛びついて何の苦もなく上にあがったのを見たのはこのときが初めてであった。このとき既に現在までの彼の吊り輪に対する素質が発揮される第１日目が始まっていたのかも知れぬと今さらながら思われる。それに彼が今日までの成績を残せた第一のものは、練習熱心と負けん気の強さである。校内クラス対抗で相撲大会に出場し、１人抜き２人抜きしているうちにとうとう決勝まで勝ち抜いてしまった。決勝で対戦した相手は180cm もある体格の相手であったが、がっぷり組んで土俵際にてうっちゃり投げ飛ばし根性と彼の底力というものをさまざまと見せられた。

彼にとって高校に入ってから何度目かにあたる合宿のときの思い出がある。１年生であった彼は、食事当番で飯を炊いていたときに薪があまりなかったらしく近くにあった机か椅子を燃料代わりに使ったらしい。顧問の酒巻先生にこっぴどく怒られたが、「俺は机か椅子を壊して燃やした覚えがない。」と言い張り謝ろうとしない。「お前みたいなやつは体操部にいなくたっていい。今限りで退部しろ！！」とすごい剣幕で怒られていた。私達部員一同で「退部させないで勘弁してやって下さい・・・。」と頼んでも先生はとても許してくれなかった。その後いつ頃許されたのかはわからないが、いつの間にか部員と一緒に練習していたところを見ると、たぶん先生の許しが出たのだろう。最も当時１年生部員２人しかいなかったし、彼をやめさせると・・・部員数もピンチに立たされているときでもあったので。

彼が個人として１年生の時に出場した試合の成績はなかなかいいものであった。平均すると７点台で安定したものだった，試合度胸もよく、図々しいほどの落ち着きと確実さがあった，地方の大学にいてあれだけ活躍できたというのは、やはり練習熱心と根性と図々しい程の度胸であったように思う。「念願はそれを持ち続けてこそ達せられる。」という言葉があるが、彼の根性にピッタリ合っていたようである。埼玉国体に私の妹が体操選手として出場していたので上尾の体育館まで見に行ったとき、やはり国体に一般の部の選手として出場していた彼に会った。「平原さん、絶対優勝してみせますよ、絶対ですよ。」笑いながら力強くしゃべっている姿が頼もしかった。言ったとおりに優勝してしまった。いつ見ても体全体に底力という筋が通っていた男！それが“中村武”という男であったように思う。

中村さんをしのぶ

春日部高校 17 回生　埼玉大学　関口　文生

私が交通事故のため入院し、週浣したその翌朝の事である。新聞で中村さん夫妻の事件を知り、恐ろしさと怒りが込み上げるのをどうしようもなかった。あまりにも恐ろしいことが続くからだ。私の加害者は事故発生直後、まず酒を飲んでから処置にかかったという。そして今度はこのニュース。人間の良心を疑いたくなる。数週間後、ついに中村さんは他界した。あの不死身とも思われた人が、こんなにもたやすく殺されるとは、信じられぬことであった。私が体操競技を知ったのは中学時代である。高校進学を迎えて春日部高校の体操の強いことを知り、私の進学する高校は半ば決定していたそして入学と同時に体操部に入部、時に中村さんは３年生であった。その容姿を見るや、ただ驚くばかりであった。腕、肩、足に盛り上がる筋肉は古代ギリシャ彫刻に代表される体格をしていた。クラブ練習の後、同僚の者と電車の中でその鍛えられた筋肉についての噂話はしばらく続いた。またそれの憧れも持った。

春日部高校入学間もない頃、私は応援団による新入生全員を対象としてその練習をさせられるのが嫌いだったのでこれを避けようとうまく校門を逃げたが、八木埼駅にて応援団員に捕まり引き戻されるところを助けてくれた人が中村さんであったことは今も忘れず感謝している。

数年後、今度は私の春高を去り進路決定の時がきた。私は大学は機械工学科を選び、ついに落ち着いたのが埼玉大学であった。私が何となく体操部の練習場に見学に行ったとき、中村さんは私の姿を見つけるとすぐさま体操着を用意してきた。私は何の抵抗も感ぜずそれを受け入れ再び体操を始めることとなった。時に中村さんは大学４年生、主将として活躍、何の因縁であろうまたまた中村さんの後輩としてその指導を受けることとなった。練習は相変わらず厳しく、しかしながら埼玉大学体操部は明るく、全員兄弟の集まりのようであった。特にコンパや合宿においてはこれまでにない種々の事柄を学ぶことができた。合宿では消灯時の中村さんの巧みな「お話」を聞くのが楽しみであった。

中村さんの現役時代には大学においても１年間のみの指導を受けた私であるが、その後埼玉国体が間近に迫りそれに邁進する中村さんは度々埼玉大学を訪れ、共に練習できたことは私達にとって重要なチャンス到来であった。私達の難技の練習にとって最も安心できる補助者となってくれたからである。中村さんの技術は天性の才能のためかと思われたが、その練習ぶりは真剣そのものであった。中村さんの体操にかける情熱、努力も大いなる要素となっていることに気づき、このとき埼玉大学体操部はその情熱に打たれ一層練習に身が入ったのである。あの埼玉国体における中村さんの埼玉県代表としての活躍、偉業は体操を愛し、体操に傾けた情熱が生み出したものであろう。私が一昨年関東甲信大会にて総合優勝したのも陰に中村さんの力があったればこそである。

私は及ばずながら、あなたのその情熱を持ってこれからの社会に臨みたいと思う。中村さん、あなたによって埼玉大学体操部は充実し、向上したところにあなたは生きている。あなたの情熱はあなたとともに体操にいそしんだ人々の中に生きていることと思う。

中村さん、安らかに眠っていただきたい。

中村先輩の思い出

西川　求

私が母校春日部高校に入学したとき、中村武先輩はちょうど卒業されて埼玉大学に進学され、直接在校中に同校生として指導を受けたことがなかったのにもかかわらず中村先輩は私の体操人生に大きな影響を与えた人の一人であることは確かなことであります。以前から中村先輩こそスポーツマンの見本であると思っていました。試合には全力を尽くし、それでいて演技中は勝負にこだわらず自分の持てる技を発揮することのみを考えているように思え、私はただ中村先輩の演技に感心するだけでした。私の在校中はよく埼玉大学へ教えを請いに行ったこともあるし、また中村先輩をはじめ埼玉大学の先輩もよく母校へ指導に来てもらっていたので私も中村先輩の人となりをよく知っている一人であると思っています。合宿等の練習中は非常に厳しい人との話でしたが、私にはそうは思えません。中村先輩に指摘されたことは未熟な私には１つ１つもっともなことと思い、中村先輩の指導は全く苦痛には感じられませんでした。いつかの夏の合宿のときなどは、吊り輪の練習中に中村先輩が審を持ちながら下から私の足が曲がっていると怒鳴られたことがありましたが、そのときは自分の足ながらどうしようもできずに困り切ったものでした。今となっては本当に懐かしい思い出として私の心を離れません。また中村先輩には特に合宿中いろいろなことを教わりました。トランプ、花札、将棋、囲碁等ゲーム一般何でもです。それにいろいろな私達の知らない歌を歌って、みんなを笑わせてくれたものです。あのときの中村先輩を思い浮かべると、亡くなったことは今でも信じられないくらいです。

私が先輩に最後に会ったのはあの事件に遭われる5日程前で、偶然にも大宮のビリヤード場でした。そのときは混んでいたので私はせずに中村先輩のやるのを見ながら、20分程とりとめのない話をして中村先輩の教えている上尾中学の体操部が強くなったとか、ボーリングで200アップを出したのでもう西川には負けないとか言っていつもと変わらない話しっぷりでしたのに、今ではもうその声すら聞けないのかと思うと寂しくってたまりません。

最後に私が中村先輩の入院中お見舞いに行かなかったことは、言い訳になりますが中村先輩の普段から鍛えた体と現代医学で必ず全快するものと信じ切っていたので、もっと元気になってからと思いながらこのようなことになってしまったことを中村先輩はもちろん私の先輩諸兄、また後輩にも申し訳ないと後悔している次第であります。

尊敬する先輩　中村さんへ

宮沢　英雄

自分は中村さんを合宿と試合でしか知らない。春高へ入ったその春の合宿で中村さんにしぼられたのはまだ記憶に新しい。あのときすでに自分はあの人のがっしりした体・腕・全体に驚きと少しばかり烈布の念を感じながら器具に飛びついていた吊り輪で上に上がる苦しさを知らされた最初の人はあの人であったし、平行棒のアームスイングの痛さを最初に知らされたのもあの人からだったように思う。練習には常に厳しさがあって、意気地なしの自分にはあの人と一緒に練習をすることにはいつも少しばかりの苦痛が伴っていたように気がする。これとは少し矛盾するようではあるが、あの人はもう1つの面として練習にリラックスなムードを与える術を心得ていたように思う。それがあの人独特のあのユーモアに原因したのではあるまいか。練習の苦痛があのユーモアによっていつも吹き消されてしまったのは何とも不思議でならなかったあの頃の自分達は、試合においては非常に弱くて春高全盛時代を作った先輩に対しては頭を上げることができない状態で、いつも試合が終わるとガッカリした気持ちでいたものだったけれど、それに続く一般競技は誇らしい気持ちをもって見ることができた。それというのも中村さんがいたからに他ならない。あの人の吊り輪は実際見事なものいつも観客を魅了していた，でも鞍馬は生まれつきの姿勢欠点と言うべきか、少し胸をハラハラさせて見なければならなかった。けれどその度ごとに国体出場資格を獲得し、それに影響されて自分も頑張るぞと心に誓ったものだった。なにしろ自分の高校時代の大半を占めていた体操の思い出の中であの人と結びつくものは非常に多い・・・。吊り輪につかまって下から箒でつつかれたことや手の皮をむいて痛いのに無理矢理鉄棒に飛びつかされたことなどは今すぐ目の前に浮かんできそうな気がする。あの頃は全く苦痛以外に何も感じなかったけど、今思うと苦しい思い出ほど心に刻まれて、あの人がいなくなったためであろうか一層懐かしく感じられる。この先、体操の試合を見に行ってもあの人の姿を見ることができないのかと思うと寂しい気がしてならない。

最後にあの人にいろいろお世話になったことに対して感謝するのと同時にあの人の冥福を祈りたいと思います。

故中村さんをしのぶ

富田　静雄

春日部高校、埼玉大学ともに体操部という限られた枠の中で先輩でありました中村さんを初めて知ったのは僕が中学1年の時でした。桜木中の運動会に埼玉大学生を招いて、僕たち中学生の演技にさらに体操はこうだというように一層高度な技を加えて模範演技をよいものにしてもらいました。中村さんが体操着姿で僕たちの練習していた講堂に来たとき、何というかズングリしていて体操をやっているとこんなに肉

がつくのかと心配したほど筋肉だらけの人のように思いました。そして中村さんが発した第一声は「ガチョーン」という言葉でした。

そして中学校を卒業してすぐの、春高に合格はしていても入学をしていなかった3月の末の合宿のときのほんの半日のことでしたが僕たちの練習を見て下さいました。あのときは埼玉大学も合宿をしていたと聞きました。合宿に中村さんが来ると「しぼられる」などとみんなでよく言ったものでした。でも今考えるとほとんどそんなこと、中村さんに練習を見ていただいたことがなかったように思います。また年齢的に離れていたためか話をする機会がなかったことによっても、中村さんの人間としての内面に触れたことがなかったように思います。

僕は中村さんを、ただ高校・大学の先輩で楽しいこと、ちょっと下品なことを言って人を笑わせていたとだけ考えていたのではなく、僕のような立場から見て生意気な言い方をすれば、中村さんの試合における力強さと練習における馬力というようなものにスポーツマンとして感ずるところがあったように思います。やはり言葉でなく何か他のものが僕に、中村さんの人間くさいところを見せつけてくれたのでしょう。あの時口感じた中村さんのような行動力、バイタリティーは僕が自分のものとすることを学ばなければならないと思います。

僕が中村さんをお送りするにあたって考えたことは、誰もがそう考える平凡なものかもわかりませんが、埼玉大学体操部であとの3年間精一杯やろうということです。

中村さんの思い出

春日部高校体操部　遠山　信二

中村さんが亡くなられてから早いもので、もう1年余りが過ぎてしまいました。私は中学生のときから体操を始めておりましたので、何度も試合を見に行きました。そしてそこで中村さんの演技など拝見しました。中村さんはメガネをかけており身長が低いので見てすぐわかりました。ちょうど埼玉国体のときで、中村さんも体操競技に出場されてよい成績を上げ、たしか団体優勝なさったと思います。

中学3年の夏に埼玉県内の中学生男女それぞれ10名を選び、体操の強化合宿が行われました。私はそれに、補欠として2日間だけ参加しました。そこで初めて中村さんとお話ししました。そして中村さんから大変厳しいご指導を何度も受けました。たった2日間のことでしたが、大変勉強になりました。おかげで県大会ではよい成績を収めることができました。しかしそのときは、まだ中村さんが春高出身ということを知りませんでした私もどこの高校に入るのかわかりませんでした。そして私は春高に入学しました。それで今度は春高の先輩としていろいろとご指導していただくことになりました。中村さんは上尾中学校の教師をなさっておられたのでお忙しかったのでしょう。試合の時くらいしかお会いすることができませんでした。高校に入学し、1年生ではありましたが私は幸いにも試合に出場することができました。その大会で中村さんに、中学の時同様ご指導していただきました。不幸にしてそれが私が中村さんからご指導していただいた最後のときでした。もっといろいろご指導していただきたかったのですが。今後中村さんのお言葉を思い出しながら、中村さんのようにはいきませんが後輩の指導、練習に努力したいと思います。

中村先生

春日部高校体操部　川村　直人

先生のあだ名は「ロボタン」。小柄で少し横幅が広くて筋肉隆々とした体格、こんなところからつけられたあだ名である。先生は私が中学校に入学した年に、先生も中学校に体育の先生としておいでになりました。そして体操部の顧問として、コーチとして大変苦労をして下さいました。先生の苦労と努力によっ

て、私達の体操部も県下第一の実力校にのし上がりました。これも毎日私たちの練習のコーチをして下さった先生のおかげです。先生の教え方のなかにはとても厳しいものがありました。しかし練習以外の場では、先生はとても面白くユーモアがありました。クラブが終わるとたいがい何か話をしてくれました。先生は体操部だけでなく、他のクラブの人たちともとても仲がよく、クラブの後にふざけたり笑わせたりしていつも楽しそうでした。だから先生は生徒になかなか人気がありました。でも先生は気が短くて、よく生徒をぶっ飛ばしたりしていました。学校内でも「ロボタンのパンチは、効くよ。」という噂もあったくらいです。そんな先生でもやはり先生は私にとって、いや私達にとってもよい先生でありとても話せる友人でもあったのです。その先生が亡くなって、早くももう1年。今ではもう先生のお墓に行く人も数が少なくなって先生のことなど忘れたがのごとく暮らしていますが、私達の心の中には先生のことがいつもあるのです。

雑記

追悼集は最初の予定では早い時期に出す予定でしたが、いろいろ事情があり遅れてしまいました。したがって早く原稿を出された方の文章に時間的なずれがあると思いますが、この点ご承知おき願います。不慣れで思うようなものができませんでしたが、寄稿された方々に厚くお礼申し上げます。

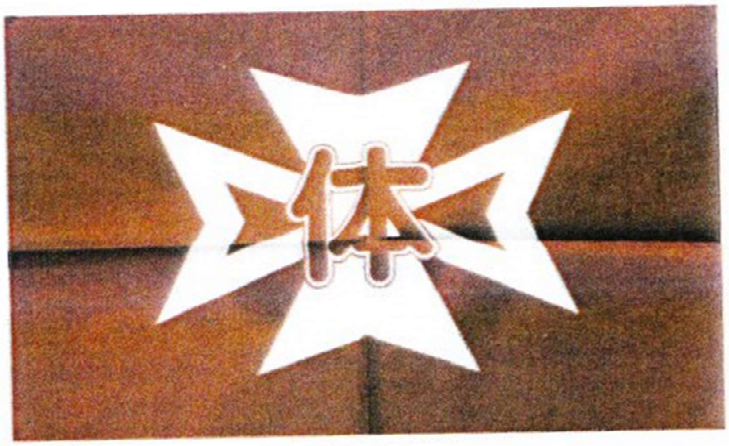
発行所
埼玉県立春日部高等学校　体操部OB会
昭和45年11月22日
〈編集兼発行責任者〉
OB会会長　飯村　文雄
事務取扱　田中　靖男
〈印刷〉
東武タイプ印刷

雑記

体操部の先輩である3名の方(加美安之さん、林晃さん、中村武さん）のそれぞれの追悼集を1冊に纏めてはどうか、と金子会長より依頼されてからかなりの時間が経過してしまい、申し訳ありませんでした。また、追悼集の中の文章は50年以上前のものでしたので、文字が解読できない箇所もあり、意味が通じなくなってしまったところがあるかもしれません。

編集に不慣れなことと校正が不十分だったことをあわせてお詫び申し上げます。

令和元年 11 月 23 日発行
編集担当　第 28 回卒業　吉住　定男
印　刷　　山栄印刷


体